

[短報]

ぶどう新品種「藤稔」の特性

内田 哲嗣*¹ 日下 孝人*² 稲川 裕*¹ 松井 文雄*³

ぶどう「藤稔」は、神奈川県青木氏によって育成された黒色の四倍体大粒ぶどうである。ハウス栽培における成熟期は中央農試では9月下旬～10月上旬、余市町では9月中下旬。果粒は大きく、食味がよい。花振いの発生は比較的少なく作りやすい。本品種は北海道ではハウス栽培が前提となる。

結 言

近年生食用ぶどうの主流は「巨峰」に代表される大粒系品種になりつつある。栽培面積から見ても四倍体品種を中心とした大粒系品種が全体の約40%であり、消費者の人気の高い。

北海道では「キャンベル アーリー」(以下「キャンベル」)などの中粒種が主流であるが、今後大粒系品種が求められるようになって考えられる。しかし、一般的に大粒系品種は熟期が遅いためハウス栽培が前提になることや、比較的栽培管理に多くの手間がかかるため、北海道ではあまり普及していないのが現状である。

現在、一部では「紅伊豆」など果皮の赤い品種が作られているが、生産者からは、北海道のハウスで栽培可能な果皮の黒い大粒系品種を要望する声強い。

「藤稔」は紫黒色のぶどうで、四倍体大粒種としては、花振いが少ないことから栽培しやすく、品質的にも優れた点が多い。耐寒性はハウス栽培であれば問題はない。

そのため、本品種は消費者の嗜好の変化に対応し、品種の多様化を図る上で有用な品種として普及が期待される。

来歴および育成経過

「藤稔」は1978年、神奈川県藤沢市の青木一直氏が、「井川682号」を種子親とし、「ピオーネ」を花粉親として行った交配から選抜された。1982年初結実。1985年に種苗法に基づく品種登録がなされた。

中央農試では、平成8年度から「生食用ブドウ優良品種選定試験」として場内および余市町園芸試験場のハウ

2000年6月9日受理

*¹ 北海道立中央農業試験場, 069-1395 長沼町

*² 同上 (現:北海道立花・野菜技術センター, 073-0026 滝川市)

*³ 同上 (現:北海道立北見農業試験場, 099-1496 訓子府町)

スにおいて大粒系品種の適応性の検討を行ってきた。

特性概要

1. 形態および樹性

幼梢先端の色は薄赤、綿毛の密度は中位。熟梢の色は褐色。成葉は五角形で、3片葉、5片葉が混在する。葉柄裂刻は開き、上裂刻の形は閉じる。葉柄の色は淡紅色で、葉の綿毛は無～極粗。

観察によると樹勢は強い。幹周、樹冠占有面積、新梢数から見た樹体生育は「キャンベル」よりも強く、「紅伊豆」より弱い。枯死芽率は問題ないレベルである(表1)。

2. 生育相

発芽期および展葉期は「キャンベル」と同時期、開花期は「キャンベル」よりやや遅い(表1)。

3. 成熟期

5月上旬に被覆した場合の成熟期は、中央農試では9月下旬～10月上旬で「キャンベル」より1～2週間遅い。余市では9月中下旬で「キャンベル」より2～3週間遅く「紅伊豆」とほぼ同時期(表1)。

4. 生産性

1樹当たり収量は、初結実から3年間の合計では「キャンベル」と同等である。「紅伊豆」と比較すると樹冠の拡大が遅く、1樹当たり収量は劣るが(表1)、樹冠占有面積当たりでは多い(表2)。

5. 花振い

四倍体品種は、品種特性や樹体内の養分バランス不良等から、花振いが発生しやすい品種が多い。「藤稔」の場合は「キャンベル」よりは多いが、「紅伊豆」より少なく、四倍体大粒種としてはつくりやすい(表3)。

6. 果実特性

粒着はやや密。果粒形は短楕円形、果皮色は紫黒色、果皮と果肉の分離は容易であり食べやすい。果肉特性は崩壊性と塊状の間で果肉の硬さは軟らかい。弱いフオクシー香が感じられる。裂果は少ないが、観察によると

収穫が遅れると発生することがあるので注意が必要である(表3)。果粒は極大で、糖度は高く酸度は低い(表4)。

7. 食味

平成12年、「藤稔」、「キャンベル」、「紅伊豆」について、40人に食味調査を行ったところ、「藤稔」の食味が、「良い」もしくは「非常に良い」とした回答が80%であり、「キャンベル」、「紅伊豆」を大きく上回る評価であった(表5, 6)。

8. 耐病虫性

ハウス内では、開花期を中心に年間3回程度の病害虫防除を行ったが、特に問題となる病虫害の発生は見られなかった。

9. 適地及び栽培上の注意点

栽培に当たってはハウス栽培が前提になる。適地は生食用ぶどう栽培地域であり、普及面積は20ha(果樹振興計画、大粒系品種17年度目標面積の半分)が見込まれる。

栽培上の注意点として、①寒害を防ぐため、冬期は枝おろしを行う。②剪定は、四倍体品種で樹勢が強いため、

間引きを主体として極力弱くする。③着果過多は、果粒肥大不足、熟期の遅れ、品質低下、耐寒性の低下など悪影響が大きいので注意する、などである。

論 議

「藤稔」はこれまで北海道で主に栽培されていた「キャンベル」等の品種に比べて、極めて果粒が大きく、食味が良いことが特徴である。ただし、現在のぶどうのハウス栽培面積から考えて、大規模に普及させることは難しい。そのため、利用場面としては、当面は観光果樹園や直販にとどまるが、今後ぶどう栽培は一段と大粒系品種へ移行していくと思われるため、北海道でのぶどう栽培のレベルアップのためにも「藤稔」は有望な品種といえる。

今後北海道における大粒系品種に求められる特性としては、①9月上～中旬に収穫可能な早熟性、②高糖度、低酸、より一層の大粒性といった食味や外観の向上、③中庸な樹勢や花振り、裂果が少ないといった栽培しやすさが挙げられる。

表1 樹体生育及び生育相

場所	品種名	樹勢		枯死 芽率 (%)	収量/樹		発芽期 (月日)	開花期(月日)			成熟期 (月日)
		1~5 *1	1~5 *2		果房数	重量 (kg)		始	盛	終	
中央	藤稔	3.8	4.4	-	19.5	4.9	5.7	6.27	6.30	7.4	9.30
農試	キャンベルアーリー	3.3	3.8	-	46.6	5.2	5.7	6.24	6.27	7.1	9.18
	紀伊豆	4.5	4.1	-	19.9	3.9	5.7	6.25	6.28	7.2	9.30
余市町	藤稔	4.3	4.3	11.1	102.2	40.1	5.9	6.15	6.18	6.23	9.21
	キャンベルアーリー	3.7	4.8	14.9	97.3	39.3	5.8	6.13	6.15	6.20	9.2
	紀伊豆	4.5	4.3	9.4	151.3	47.9	5.10	6.15	6.17	6.22	9.21

注) 栽培法 中央農試: 根域制限栽培, 栽植距離2m×1m(500樹/10a)

余市町: 地床栽培, 栽植距離8m×6m(約20樹/10a)

樹勢、登熟度は平成8年~11年の平均 収量/樹は積算値

生育相は平成9年~11年の平均値

*1 1(弱), 2(やや弱), 3(中), 4(やや強), 5(強)

*2 1(不良), 2(やや不良), 3(中), 4(やや良), 5(良)

表2 樹冠占有面積およびm²当たりの
新梢数、果房数、収量 (余市町)

品種名	樹冠占有面積 (m ²)	新梢数 (本/m ²)	果房数 (個/m ²)	収量 (kg/m ²)
藤稔	35.5	1.52	1.37	0.55
キャンベルアーリー	36.6	0.83	1.25	0.51
紅伊豆	50.4	1.42	1.43	0.46

注) 平成10, 11年の平均値

表3 果実形質

場所	品種名	花振り	果房形	粒着	果粒形	果皮色	はく皮	果肉特性	果肉硬度	香気	裂果	脱粒
中央農試	藤稔	中	円錐	やや密	短楕円	紫黒	易	中間	軟	微フクシー	なし	易
	キャンベルアーリー	中	円筒	やや粗	円	紫黒	易	塊状	硬	フクシー	なし	易
	紅伊豆	中	円錐	中	倒卵	赤紫	易	中間	軟	フクシー	わずか	易
余市町	藤稔	わずか	円錐	やや密	短楕円	紫黒	易	中間	軟	微フクシー	わずか	易
	キャンベルアーリー	なし	円筒	密	円	紫黒	易	塊状	硬	フクシー	なし	中
	紅伊豆	少	円錐	やや密	短楕円	赤紫	易	中間	軟	フクシー	わずか	易

表4 果実品質

場所	品種名	果房長 (cm)	果房重 (g)	果粒重 (g)	糖度 (brix %)	酸度 (g/100ml)	1粒当たり 含核数(個)
中央農試	藤稔	15.3	281	12.5	17.0	0.53	2.1
	キャンベルアーリー	13.0	143	5.0	16.6	0.81	3.1
	紅伊豆	15.2	253	12.1	16.6	0.90	1.7
余市町	藤稔	19.4	458	14.8	18.1	0.44	1.7
	キャンベルアーリー	19.1	473	5.3	15.8	0.64	3.0
	紅伊豆	19.1	383	13.4	19.3	0.60	2.3

注) 平成10, 11年の平均値

表5 食味調査結果

	藤稔		キャンベルアーリー		紅伊豆	
	人数	%	人数	%	人数	%
1:非常に悪い	0	0.0	0	0.0	0	0.0
2:悪い	2	5.0	3	7.5	5	2.5
3:普通	6	15.0	18	45.0	16	40.0
4:良い	12	30.0	14	35.0	16	40.0
5:非常によい	20	50.0	5	12.5	3	7.5
平均評点	4.3		3.5		3.4	

表6 食味試験供試果実の果実品質

品種名	収穫 月日	糖度 (brix %)	酸 (g/100ml)
藤稔	9.27	19.1	0.42
キャンベルアーリー	9.29	17.9	0.55
紅伊豆	9.27	19.8	0.58

注) 「藤稔」「紅伊豆」は余市町ハウス、「キャンベルアーリー」は中央農試露地のもの

A New Grape Variety “Fujiminori”

Tetsushi UCHIDA*, Takato KUSAKA,
Yutaka INAGAWA and Fumio MATSUI

*Hokkaido Central Agricultural Experiment Station,
Naganuma, Hokkaido, 069-1395 Japan